

## 絵本の読み聞かせ速度が 子どもの物語理解と集中度に与える影響

井手 彩乃

絵本は子どもが人生において初めて出会う本である。絵本の読み聞かせが一般的な活動となっている現代において、子どもにとって効果的な読み聞かせ手法を検討することは重要な課題となっている。本研究では、読み聞かせ方法のうち読む速さに着目し、速さの違いが絵本の内容に対する理解度と読み聞かせに対する集中度にどのような影響があるかを明らかにすることを目的とする。

本研究では、読み聞かせの速さが異なる3種類の録音音声を使用して実験を行った。基準となる通常の速さの読み聞かせ音声は、読み聞かせボランティア経験のある学生の音声を使用した。速さは平均で毎分272.0字である。速い読み聞かせ音声は通常の読み聞かせ音声を1.3倍速、遅い読み聞かせ音声は0.7倍速にして作成したものである。絵本の内容に対する理解度の測定には紙面によるテストを行い、読み聞かせに対する集中度の測定には視聴コンテンツの制作で活用されているディストラクター・メソッドを用いた。実験参加者は年長児26名（男児12名、女児14名）である。実験参加者には予めLCスケール（言語・コミュニケーション発達スケール）の「手ごたえ課題」を実施し、言語発達レベルが均等な3グループを作成した。その後、各グループを読み聞かせの速さによって3群（高速群、統制群、低速群）に振り分け、絵本の読み聞かせを行った。なお、読み聞かせ中は、録画によりディストラクター・メソッドを用いた子どもの視線の動きを計測した。読み聞かせ終了後には、理解度テストを実施した。理解度テストは、物語の事象に関する設問5項目と登場人物の心情に関する設問5項目の計10項目から構成される。

実験の結果、理解度テストでは、読み聞かせの速さによって各群に有意な差は見られなかった。事象項目、心情項目いずれにおいても有意な差はなかったことから、物語理解への影響は今後も検討が必要である。一方、集中度の測定では、高速群と低速群で差は見られなかったが、統制群は他群に比べて注視率が有意に低い結果となった。また、理解度テストの事象項目の結果と注視率には、有意に弱い正の相関が認められた。

以上の結果から、読み聞かせの速さが速い場合と遅い場合では、子どもの集中度が高くなる可能性があることが明らかとなった。また、子どもは読み聞かせに集中している程、物語の事象を理解している可能性があることが示唆された。今後の課題は、異なる絵本を用いて検証すると同時に、サンプル数を増やすことでデータの信頼性を上げることである。また、子どもにとって効果的と言える適切な読み聞かせの速さを調査するためには、より多くの速さの読み聞かせ音声を用いて検証することが必要である。

（指導教員 松村敦）